



TITLE:

静脩 号外 (1984.4) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 号外 (1984.4) [全文]. 静脩 1984, 号外

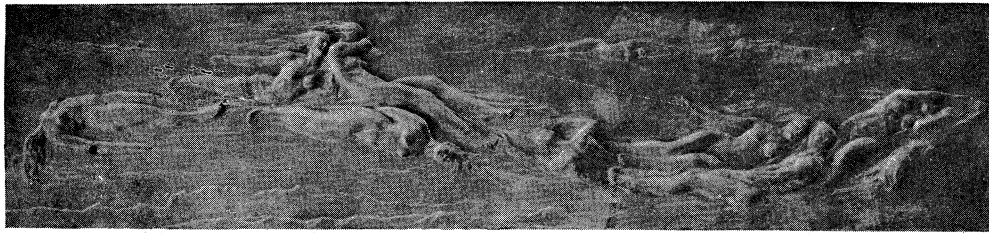
ISSUE DATE:

1984-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65980>

RIGHT:



# 静脩

1984年4月

号 外

The Kyoto University Library Bulletin

## 京都大学附属図書館開館記念式典に際して

京都大学総長 沢 田 敏 男



本学附属図書館では、去る3月21日(水)開館記念式典を挙行了。以下は、式典における、沢田敏男総長からのご挨拶です。

本日、ここに京都大学附属図書館新館の開館記念式を挙行されるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本学の附属図書館は、明治32年に開設以来、今年で85年を迎えたのでありますが、この間、歴代館長のご尽力と館員諸氏のご努力によりまして、わが国屈指の大学図書館として発展、充実してまいりました。この八十有余年の歴史における図書館のたゆまぬ努力と教育、研究への積極的な寄与に対しまして深く感謝し、心から敬意を表するものであります。

戦後間もない昭和23年に完成いたしました旧図書館は、著しく老朽化し、また、新しい時代に即

応した図書館活動を展開するには手狭であり、その機能を十分に果すことができなくなってまいりましたので、早くから附属図書館商議会を中心にして、改築についての検討がすすめられてまいりました。

財政事情その他により早期実現は困難でありましたが、本日で臨席の前田前々総長、また岡本前総長の時代から、林前館長を中心として、全面建替えの要求を強力に展開された結果、昭和55年秋に予算内示があり、漸く実現する見通しが立つに至りました。そして、昭和56年12月に着工、昭和57年4月より高村現館長の就任を得まして完工に向けてご尽力いただき、昨年10月にめでたく竣工をみたのであります。この間の文部省のご理解とご尽力に対し、心から感謝申し上げますとともに、前田前々総長、岡本前総長並びに林前館長、高村館長はじめ、ご関係各位のご尽力に厚くお礼申し上げたいと存じます。

新しい図書館は、昭和56年から3年間にわたる計画で建てたのでありますが、その規模において旧館の約3倍となり、従前になかった施設、設備が設けられ、図書館活動の総合化を推進することが可能となりました。

このたびの図書館の完成によりまして、学生諸君の学習と教養の場がよりよい読書環境の下に提

供されるとともに、研究者のさまざまな情報要求にに応じていただき、図書館が真に京都大学の教育、研究を活性化するための重要な機関として、全学の期待に応じていただくことが、何よりも大切なことであると考えます。

幸い図書館では、新館の運営と機能の一新を最重要課題とし、他大学に例をみないような施策をまとめ、着々実施に移しておられますことは力強い限りでございます。伝統あるわが京都大学の学術研究の一層の進展のために、館員諸氏が意欲にみちた図書館づくりを目指していただくならば、図書館が益々その精彩を放つものと存じます。

今日、情報化時代と言われるように、学術情報量が飛躍的に増大する中で、大学図書館をとりまく環境は大きく変わっていると思います。情報資料の選択、収集、図書館利用のあり方など大学図書館に課せられている問題は、大学教育、研究の進展に深くかかわるだけでなく、今や国際的な広がりにおいても考えるべき問題をはらんでいると考えます。特に学術の国際交流が盛んになってまいりました昨今、この面での図書館の果たす役割も、

きわめて大きいものがあると言わなければなりません。

本学の図書館が、当面する諸問題に積極的に取り組まれ、よりよい図書館づくりを目指し、斬新な活動を展開していただくよう期待をいたします。私は全学的な理解によって、大学挙げて図書館活動の活性化することをバックアップする所存でございます。今、私は新装になりました本図書館の威容をまのあたりにしまして感無量のものがあります。

本日開館記念式にあたり、本図書館の建設に情熱を傾けられ、格別のご尽力を賜りました林前館長、また、ご定年をこの3月末日に迎えられます高村現館長は、ご就任以来、本当に日夜ご尽力を賜わり、本日の完成をみましたことに對し、また、今日の基礎を築かれた歴代館長はじめ図書館商議員並びに本館の建設をご支援くださいましたご列席の各位に深甚な謝意を表するものでございます。

本学附属図書館の益々の発展を祈念し、挨拶と感謝の言葉といたします。

## 式 辞

京都大学附属図書館長 高 村 仁 一



開館にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。

京都大学の長い間の夢の一つが、この美しい装いと豊かな機能をそなえた図書館として、ここに開館の運びとなりました。新館の実現までには、色々と曲折がございましたが、とくに本日ご来臨を賜りました皆様お一人お一人が、それぞれの

時代に図書館の将来について心を砕いて下さり、やがてそれが大きな潮流となって、ついに昭和56年度の施設整備事業として文部省の認めるところとなり、今日こうして、新しい図書館を皆様にご披露申し上げることができるようになりました。洵に感慨深いものがございます。とくに館長として3期9年間、附属図書館のためにご尽力下さった林良平前館長時代の商議会において、綿密な検討を加えられ、前田、岡本両総長時代をへて、沢田現総長時代に新営構想が策定され、2年の歳月と27億の巨費を投じて、昨年10月に竣工をみたものでございます。

新しい図書館像の確立にむけてご尽力を頂いた林前館長はじめ歴代館長・商議員の方々、さらにはこの新営構想を実行に移すことを決断された

沢田総長、そしてその実現にむけてご努力頂いた事務局長はじめ、経理部、施設部その他本部事務局の関係各位に対して改めて御礼申し上げますとともに、この大きな事業にご理解を示された文部省の関係各位に対して心から敬意を表する次第でございます。

また、新館の建築に際しては、各部局に大変お世話様になりました。図書館の事務部や閲覧室のことでは、法学部や理学部、書庫のことでは非常に多くの部局の暖いご援助を頂きました。皆気持ちよくご協力いただいたお蔭で、今日まで順調に計画が進みました。

卓越した設計と高度の施工で完成したこの美しい建物を、隅々まで綿密に気配り頂いた施設部から、昨年10月28日に引渡しをうけて以来5か月、開館準備に向けての附属図書館員の働らきには見事なものがございました。このようにして、いま、京都大学の新しいシンボルとしての図書館が皆様の前にあるわけでございます。

問題は、具体的な運営をどうするか、機能をどう充実させるかであります。まず何よりも大切なことは、図書館が利用し易く、自由な雰囲気の中を漂う思索の場となりますよう、利用面での制約をなるべく少なくしたいということでございます。利用者IDカードだけで、一旦館内に入ればどこへでも夜の9時まで、書庫にも自由に入って、拾い読みして頂けます。夜間でも貸出ができます。

新しい図書館の特徴の一つは、研究図書館としての機能の充実にあろうかと思えます。お手許の附属図書館報「静脩」にも委しくありますように、まず高額参考図書の整備計画が挙げられます。Beilstein Handbook や Current Contents とか、Chemical Abstracts の Collective Index や国連・国際機関・主要国統計などのような大型の二次資料をはじめとする高額参考図書は、部局単位での維持が困難となりつつありますので、全学的な合意のもとで予算措置を講じて頂き、1階の参考図書室に配置されます。

また1階の雑誌閲覧室には、工学部の全面的な協力のもとに、工学部化学6教室の予算で購入される化学系和洋雑誌151タイトル及び工学部共通

図書室の外国雑誌107タイトル、計258タイトルのジャーナルが、新着雑誌を中心として配架され、全学の共同利用に供されます。

さらに、地下2階には40万冊を収容しうる学術誌のバックナンバー・センターを設置いたしました。今後各部局の希望に応じ、ここにバックナンバーを集中的に収容いたします。本学には約26,000タイトルの学術雑誌の長年にわたる蓄積があり、質量ともに国内屈指のコレクションとして、学内の利用はもちろん、全国的規模でも、大きな貢献を果すものと期待しております。

一方、一昨年設置いたしましたテレックスによる研究情報の国際交流は増加の一途を辿り、今後は校費以外での利用もはかられますので、研究情報の国際交流に大きな役割を果すことが期待されます。図書館には、また、分野を越えた専門の交流の場となりますよう、教官談話室や共同研究室もでございます。また、今までと違って、名誉教授はもちろん定年退官された教職員にもIDカードを用意し、本の貸出もできます。このことによって、図書館が先輩と現役との学問の交流の場ともなりますよう願っております。

4月の開館と同時に、閲覧・貸出し業務は電算化されますが、受入・目録および雑誌処理、検索を含むトータル・システムについては、昭和59年度の予算の内示を文部省から頂いておりますので、明年初頭からは全面稼働し、いよいよ、学内はもとより、地域センター館として、また全国的な学術情報システムにもつながってまいります。

新しい図書館ができて、訪れる学内の方は、京大にもこんな立派なところがあるのかと、感心されます。それが、機能的な中味ではなくて、机や椅子や什器類をごらんになっての印象なのが、一寸残念ではございますが、しかし立派な什器類は図書館の雰囲気をつくるのに非常に大切だと思っております。事務部門はなるべく押えて、皆さんが利用される部分は、妨げのない、静かな、読書と思索の場にふさわしい雰囲気をもつよう、木製品を中心に心安まる環境づくりに館員が気を配りました。各業者の方々も京大図書館に納めるのならばと、損得ぬきで大勉強して下さいました。

ありがたいことです。いまから少なくとも半世紀、その風雪に耐えて、先人の手垢がしみ、重厚味を加えるであろうこれらの机が、そのまま京大の歴史を刻み、学風を語り伝えるものとなることを希っております。

私どもは、京都大学の図書館を、大学における教育・研究活動に対する〈支援機構〉であると、自ら明確に規定しております。新しい図書館の開館を迎えて、教職員の方々は申すに及ばず、未来を背負う学生諸君にも、この図書館を十分に活用して頂き、伝統を誇る京都大学のアカデミズムが一層の輝きを増すのに役立ちますよう、積極的な役割を果たすべく図書館は努力してまいり所存でございます。

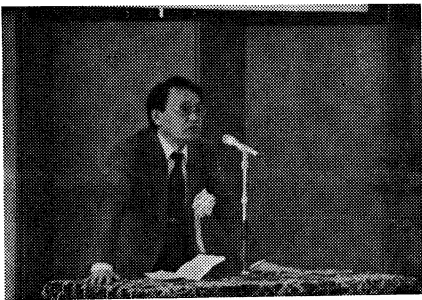
本日ささやかな記念品としてお手許にさしあげた図書館行事表には、Academic Year に従い新学期の4月から休館日や夜間開館休止日が記され

ておりますが、ここに紹介されている絵詞は本館が所蔵する3万冊の貴重書の中から選んだお国歌舞伎の物語でございます。めったにお目にかかれぬ古典にふれる楽しみも味って頂き度く、みんなで工夫してみました。

終りに、学外からご多忙の中を遠路この開館式にご臨席賜りました文部省学術国際局の広田課長、管理局の福田課長、全国国立大学図書館協議会長の裏田東大館長、各大学図書館長はじめご来賓の方々に厚く御礼申し上げますとともに、歴代総長はじめ学内にあってこの図書館の新営と整備に心を砕いて頂いたご列席の皆様お一人一人に改めて深甚の謝意を表します。今後とも図書館の活動に対して、深いご理解と暖かいご支援を賜わりますようお願いして、ご挨拶といたします。ありがとうございました。

## 祝 辞

文部省学術国際局情報図書館課長 廣 田 史 郎



本日の京都大学附属図書館新館開館記念式典には、大崎学術国際局長がご祝詞を申し上げるはずのところ、あいにく国会開会中で残念ながら出席できませんので、私から代って祝辞を申し述べさせていただきます。

京都大学関係者の方々に永く待ち望まれていた、新しい附属図書館が、昨年10月に建物の竣工をみて、いよいよこの4月から開館の運びとなりますことは、まことにめでたく心からお慶び申し上げます次第でございます。

大学の教育あるいは研究の基本施設としての附属図書館の重要性につきましては、ここで改めて申し上げる必要もないかと存じますが、大学図書館は当該大学のシンボルあるいは心臓であると言われておるものでございます。京都大学の図書館はたいへん環境にもマッチしたすばらしい建物でございます。この施設は総面積にいたしまして従来の約3倍の14,000㎡、蔵書の収納能力は110万冊から120万冊と、これまでの約2倍を数えるなど、機能が著しく拡大されているわけでございます。それをベースにいたしまして、高度で、かつ使いやすい種々の施設・設備を備えているときいております。

京都大学は、これまで社会の各方面にすぐれた人材を数多く輩出していますとともに、世界的にも幾多の輝かしい研究業績をあげられて、学術研究の発展に寄与されているところでございますが、まさに京都大学にふさわしい新しいシンボルがこのたび完成したのだと思います。

したがいまして、今後の京都大学の教育・研究の発展にとりまして、この新しい図書館の発足というものが大きな意義を有するものと存じます。

施設の基本計画の段階から今日まで十余年の年月が経っているわけですが、この間、歴代の館長先生はじめ本学関係者の方々の並々ならぬご努力の積み重ねが、今日の立派な図書館の完成をもたらしたものだと思えます。

ご承知のとおり文部省におきましては、近年における学術研究の急速な発展と学術情報流通メディアの進歩による、学術情報量の著しい増大に対処すべく、昭和55年に学術審議会から答申をいただき、その答申の線にそいまして、新たな学術情報システムの整備にむけて、その具体化を鋭意努力しているところです。その中で、大学図書館が中心的な役割を担うことが期待されております。このため、大学図書館の整備、特に大学図書館がもっておりますすぐれた人的な能力、あるいは物的な資源を有効に活用していく仕組みをつくっていくことに努力を傾けているところです。

このように新しい学術情報システムの中におきまして、大学図書館の新しい発展というものが期待されておりますときに、本学にこのような立派な図書館が竣工し、開館されるということは、本学にとってはもとより、全国的な立場からみしても、たいへん大きな意義を有するものと考えます。

この新しい図書館では、読書環境の整備はもとより、図書館資料の有効な利用の推進等利用面で

の改善に努められるとともに、図書館業務の電算化により、高度な図書館活動の展開をはかり、あるいは、学術情報システムの一環を担うための体制を整備されるなど、新しい機能の充実にたいへん努力されておられるとうけたまわっております。

特に、学内のご努力によって実施されます高額参考図書の集中配置あるいは全学的な図書の収納計画にもとづいて行われますバックナンバー・センターの設置、さらに資料の共同利用をはかるために化学系雑誌の集中配置等々、研究図書館としての機能の充実に努められておられますことは、京都大学附属図書館の大きな特色であると存じます。林前館長、高村現館長はじめ館員の方々の意欲的な取組みと、これを支えてこられた全学の関係者の理解と支援に対しまして、あらためて敬意を表するものであります。

このような試みを含めまして、今後の京都大学附属図書館の活動に対しまして、全国の大学図書館から、注目が集まるものと思われます。文部省といたしましても、他の大学図書館のお手本となるような積極的な図書館活動が展開され、先駆的な役割を果たしていただくことを強く期待しているものでございます。

終りにあたりまして、今後とも、このすぐれた施設・設備を備えました京都大学附属図書館が十分に学生、研究者の方々に活用されまして、本学の教育・研究活動がより一層発展することをお祈りいたしまして、簡単でございますが、お祝いのことばいたします。

祝

辞

国立大学図書館協議会会長  
東京大学附属図書館長

裏 田 武 夫



本日の開館おめでとうございます。ただ今ご紹介がありましたように国立大学図書館協議会の同僚を僭越ながら代表させていただき、また、日頃親戚同様にお世話いただいております京都大学のみなさまに対しまして、東京大学からお祝いと感謝の念を申し述べさせていただきたいと思えます。

実は、こちらへまいります前に何かの用件で平

野総長にお会いした折、「京都大学の附属図書館の開館式に行ってまいります。」と申し上げましたところ、「私も行きたいなあ」と手帳の日程を見ておられました。私はしめたと思ったのですが、俗に「将を射んと欲すれば馬を射よ」という言葉がありますが、私は全く逆でありまして、「馬（図書館）を射んと欲すれば将（総長）を射よ」というのが大切なことだと思っています。早い機会に平野総長がこの図書館を見に来られるというふうに聞いておりますので、その節はよろしくオリエンテーション、ティーチンをお願いしたいと思います。

京都大学のこんなに立派な図書館ができましたのは、私も前々からご指導いただいています林前館長、高村現館長のご努力は、もちろん外からみていて重々わかっているつもりでございますが、これは総長はじめ教官の方々、事務局の方々の本当に並々ならぬご苦労があったことと思うわけでございます。本当に心からお祝い申し上げたいと思います。

さて、私はしばらく前に京都にまいりまして、高村館長に工事進行中の本館を見せていただきました。本日も少し早目にまいりまして、あちらこちらみせていただいて全く感銘いたしております。非常に心を動かされました。と申しますのは私の勤めております図書館にないもの、実現したいと考えているものは、すべてこの図書館に備わっていることを発見したからであります。入口の明るさ、入りやすさ、カウンター的位置、カウンターといろいろなサービスポイントとの連絡、それから資料の論理的な配置、参考図書の排架能力（冊数）、開架図書の排架能力、リージョナルセンターとして、さきほど広田課長からお話しがありましたけれども、電算化に備えてのいろいろな配慮、本当に羨ましく思いました。京都大学の方は本当に幸せだと私はつくづく思います。私は深く感銘いたしましたが、本当に、この図書館ができて嬉しいのは誰だろうと考えますと、おそらく総長はじめ館長や先生方それぞれに嬉しいことだと思います。しかし、私は一番嬉しいのは学生ではないかと思いました。

最近、大学の教育の見直しということが深刻な問題になっております。共通一次試験実施以来、各大学の輪切り現象というのが深刻な問題として全国の国立大学の先生方の間で討議されているときいています。実際、折角いろいろと教師の側で配慮いたしましても、共通一次試験で何点だから、もう特に勉強する必要がないというふうに、徹底した輪切り現象ができていると聞いています。もし本当だとすれば非常に残念なことだと思います。これは共通一次試験のせいばかりではないと思いますが、私どももたいへん深刻な悩みがございます。教養学部の先生方に聞いてみますと、毎年20人くらいは本当に抜群の能力の学生が入ってくるそうであります。ところが卒業するときには、平凡以下の学生として出ていってしまうということでもあります。どうしてだろうか。これは、やはりそういう学生の意欲・関心というものを掘りおこしたり、つなぎとめておくだけの大学側の配慮がなかったと考えざるを得ない。優秀な学生はともかくとして、やはり一般の学生でも、大学に入ってきて勉強しようという意欲、関心というものを何となしに喪失してしまつて、卒業させてしまうということが、いかにも多いかということです。私どもも、いろいろと関係者の間で相談したのですが、やはり授業というか、教育もしっかりしなければいけない。しかし授業といつても、年間の開設する講義題目の種類というのは限度があります。時間・空間をこえた無数の教師から、いろいろの刺激をうけるという意味では、選りぬかれた情報をもっと学生が使い得るようにしておくということが大事なことではないかと思ひます。ご承知のように公共図書館もかなり充実してまいりまして、開架図書が10万冊を数えるところが増えてまいりました。東京の都心の大きな書店では、新刊書が10万～20万冊並んでいる本屋が少なくないようになりました。東京大学の生協の書籍部も十何万冊並べてあります。私どもの中央図書館では4万冊ぐらいであります。しかも古い、あまり魅力のない本がかなり並んでいるわけでもあります。すでに本屋さんと較べても負けてしまう。それから公共図書館と較べても本当に魅力

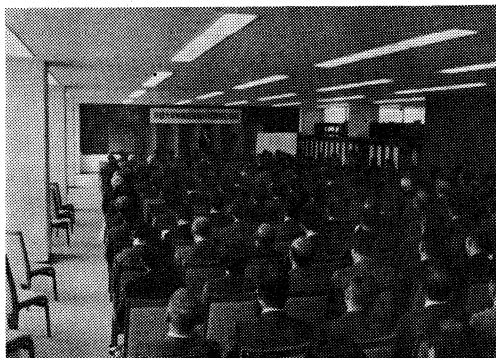
がない。これで、やっと入学試験にパスして大学へ進学した学生の意欲というもの、関心というものをつなぎとめられると考えるのは、むしろおかしいのではないのだろうか。私は、手もちの資料をどしどし開架に出しながら、何か、一生のめぐり合い、あるいは図書館へ来て、はじめて自分の何か、授業では得られなかったような知的な刺激を与えられるような機会をつくっていかう、ということ、もちろん授業に直接関連した従来の指定書を整備しておくことも大事でございますけれども、やはり何かのきっかけで、その学生たちの知的燃焼をたすけるようなことをしなければならぬと考えているわけであります。

図書館は、本を並べておいて、夜店のようにひやかしながら利用者が流れていくというだけでは全く意味がないわけであります。やはりスパークするとか、火花を散らすとか、そういう選びぬかれた情報と学生との間に知的エネルギーの燃焼といいますか、そういうものがなければ、本当は図書館というものの存在意味がないのではないかと思います。さきほど高村館長が、「図書館は大学における教育・研究の支援機関である」ということを明言されました。全くそのとおりで

あると思います。私もよい意味で京都大学の図書館に負けないように、新しく年々入学してくる学生が、まさに知的関心を燃やして、そして、教育・研究の上で充実した生活が送られるように、私どもの図書館も、ぜひ、よい意味での競争相手として、今後やっていきたいと思ひます。おそらく全国国立大学図書館協議会の同僚の方々も全く京都大学の図書館をご覧になれば、私と同じように感じられると思ひます。

私は古いことは知らないのですが、最後に、中国の古典「大学」の一句と聞いていますが、「つつしみて日に新たに、日に新たに、また日に新たなり。」ということばを贈りたいと思ひます。開館式当日の図書館がいちばん新しく、日に日に古びていくだけではないと思ひます。図書館が教育・研究の上で利用者のためになすべきこと、した方がよいことがらは無限にあるはずで、毎日のように、そうした営為と工夫がつみ重ねられるならば、高村館長のいわれる「年輪」がこの図書館の本に家具に壁にしみこんでくるに相違ありません。心からご発展をお祈りし、お祝いのことばに代えさせていただきます。

## 開館記念式典の挙 行



3月21日(水)、京都大学附属図書館新館開館記念式典が、総長、部局長はじめ学内外の関係者多数の出席を得て、新館2階開架閲覧室(南側)

において挙行された。

この式典は、午後1時に始まり、高村仁一附属図書館長の式辞に続いて、沢田敏男総長の挨拶、廣田史郎文部省学術国際局情報図書館課長、裏田武夫国立大学図書館協議会会長(東京大学附属図書館長)の祝辞、岡本道雄前総長ほかの祝電披露、戸田建設株式会社ほか4社に対する感謝状の贈呈が行なわれ、午後2時終了した。

引き続き、午後2時20分から同開架閲覧室(東側)において披露パーティーが催された。

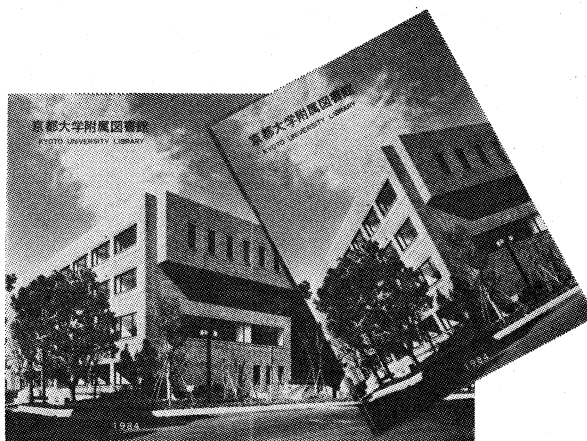
なお、3月22日(木)、23日(金)、24日(土)の3日間、学内者に対するオープンハウスが行なわれた。



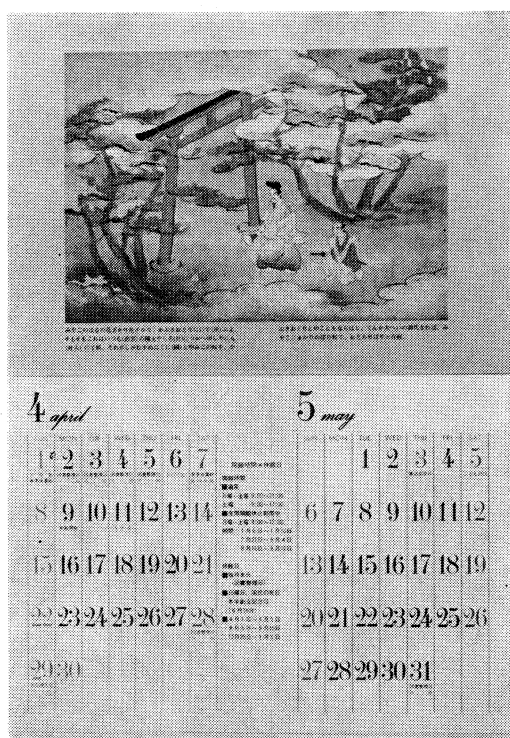
## 新館竣工パンフレット及び行事表の刊行

附属図書館では、新館の竣工に伴い『国立大学図書館竣工パンフレット作成要項』（国立大学図書館協議会第19会総会承認）に準拠した新館竣工パンフレット（写真①）を作成した。

また、開館を記念して、『京都大学附属図書館行事表』（写真②）を刊行した。この行事表は、Academic Yearにしたがって本館の開館時間・休館日・夜間開館などの業務案内を内容としたもので、利用者の図書館利用への関心を高め、かつ、利用の便をはかることを目的としたものであるが、特に、本館所蔵の貴重書の一つである『国女歌舞妓絵詞』（奈良絵本）の挿絵15面から6面を選び原色版で、物語の流れにそって掲載しており、通常、閲覧しがたい古典にふれる楽しみを味わっていただくことを趣向としている。



写 真 ①



写 真 ②

## 京都大学バックナンバー・センター構想の実現に向けて

京都大学バックナンバー・センター構想については、既報（『静脩』号外，1983.10）のとおりであります。この実現に向けて、附属図書館では、昨年12月に全部局を対象に予備調査を行ないました結果、今回、20部局から約6,600タイトル（書棚数にして約6,300棚）にのぼる収納のご要望がありました。

この予備調査に基づき、本年3月に20部局に調査を送付し、移管を希望される雑誌の調査を行な

うとともに、各部局担当者との間で、この計画をすすめるうえでの作業手順等について打合せ中であります。

今後の予定では、6月末に調査結果をとりまとめ、重複誌等の整理作業を行なって、バックナンバー・センターに収納する雑誌を決定し、11月中に雑誌を搬入していただいて、12月中旬にオープンする予定であります。

## 法学部附属国際法政文献資料センター

昭和54年4月に開設された本センターは、法学部図書室が有する豊富な文献・資料を基礎にして、それと併置された形で誕生した。

法律・政治資料には、一般の単行書や雑誌以外に、法令集、判例集、議会資料、官庁出版物、政党関係資料、等々といった、legal primary sources, political primary materials——第一次的法的資料、政治原資料——と呼ばれる特殊な資料がある。これらは法学、政治学研究にとって基本的な第一級の資料である。また、経済学、歴史学等、他の社会科学の分野に関しても貴重な情報を提供してくれる。したがって、その収集やサービスについては、これを体系的・総合的におこない得るような資料—情報センター的組織が必要である。

上記資料の内、外国の法令集、判例集については、既に、昭和38年以後、東京大学法学部附属外国法文献センターがこれを収集し、学内外の研究者、企業関係者に対してレファレンスサービスをおこなっている。それに対して、本センターは、欧米主要国の立法、行政、政治過程に関する第一次的資料、国際機構や国際関係に関する基本的文献を収集し、学内外の研究者の利用に供すること

を目的としている。この中には、官報、議会議事録、委員会レポート、公聴会記録などの政府刊行物、国際連合やECなどの国際機関出版物、政党の機関紙や大会議事録のほか、政治状況資料としての主要国や代表的新聞、労働運動・社会運動等々が含まれる。

さらに、本センターはその活動の第2の柱として、各大学、諸機関に散在している上記資料の文献所在情報を収集し、提供するという情報センターとしての機能を果たすことを目的としている。元来、第一次資料の類は高価なものが多く、一機関で集中集積するのがむずかしい。また、各機関でのニーズに応じてバラバラに資料が購入され、分散状況が生じやすい。そのため所在情報の整理・充実が重要となってくる。具体的には、現在、本センター所収文献目録の発行のほか、京都地区、関西地区、さらには全国的範囲に拡げた文献所在情報のデータ収集が目指されている。

このように立法、行政、政治関係の原資料とそれにかかわる情報を収集し、サービスすることを目的とした資料センターはこれまで全国になく、本センターに期待されるころは大きいといえ

る。

現在所収している主要な文献としては、フランス革命期の政治状況を生々しく伝えてくれる『フランス国会議事録集成 1789-1813』、北ドイツ連邦からドイッチェライヒ誕生以後、ナチに至る間の『ドイツ帝国議会議事録 1867-1933』、連邦議会誕生以後の『アメリカ議会議事録 1789-1978』、第一次ロシア革命から大革命に至る期間の『ロシア帝国議会議事録 1906-1917』といった議会議事録があり、その他、アメリカの議会委員会のレポート、プリント、聴聞会記録などへの総合索引・抄録である CIS Index & Abstract、イギリス

IUP シリーズ』、『19世紀下院文書集成 マイクロフィッシュ版』『20世紀英国政府刊行物コレクション』などの議会・政府資料及びその索引がある。とりわけ、19世紀、20世紀については学部内外からよく利用されている大型資料である。

最後に、これらの資料・文献は法学部図書室書庫に収蔵されており、その利用は、研究者に広く開放されており、目下のところ、法学部図書室利用規定に準じて運用されている。図書室閲覧掛を通じて利用できる。尚、資料・文献の閲覧・複写（学外からの複写申込みは附属図書館へ）はできるが、貸出はおこなっていない。